

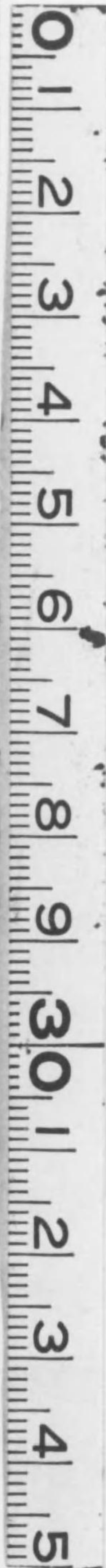
391-31



1200501459852

391

31



始



6
集詩翠晚



(著 翠 晚 井 士)



文 博

序

『天地有情』『曉鐘』『東海遊子吟』の三を『晚翠詩集』の一冊にまとめ
てから彼此八ヶ年になる。今これに『曙光』と『天馬の道に』とを
加へ、『増補晚翠詩集』と題名し、發刊するに際して往時を思ふ
と、最初の詩集刊行は今より略三十年前、東京全市を通じて一
條の電車線も無かつた時代、文學界では露伴紅葉逍遙鷗外諸
先生の全盛時代であつた。爾來明治大正の二代が過ぎて昭
和の御代となつた其中間には、日本の國運をルビコン河上に
賭したやうな對露の役があり、我にとりては漁夫の利を饒倖
し得たやうな世界大戦があり、驚異の發見があり、發明があり、
内外思潮の波瀾があつて有史以來の大變動を見た。局中に
あるから自覺はしないが、後世の史眼の見るとこゝ、我等の時

代は東西史潮の合流するところ、正しく空前の偉觀で、昔光榮の極と曰はれたメリクルス時代、ルネッサンス時代を凌駕するものではあるまいか。日露戦役以前は殆んど其存在を認められなかつた日本が、幸運にも世界列強中第一流の名をかち得る迄に急速の變化と進歩とのあつたことは内外の等しく認むるところであり、國民として多少の誇が無いでは無いが更に甚しい變化進歩が太平洋を隔てる隣邦にある、十年前にニューヨック市を去つた者が今そこに歸ると茫然として自失するばかりとは何やら、のべに讀んだやう記憶する。かゝる眩しい走馬燈的時代に本集の如きものが出版界の片隅に現はるるのは虚空を廻る一球上、人事錯綜の變幻窮り無い一端を示すものであらう。北宋の哲人が鬼神の堂と

讀した東亞最高の聖典の句を借りて曰はゞ「天地位を定め、山澤氣を通じ、雷風相せまり、水火相射さぬ」大化の作用は人間の眼から見ての無數の矛盾を造り出すが、唯物論一切宗教否定論が猖獗な今日に本集の如きものが日本詩壇の一隅に存在するの亦其一例であらう。偶然にも本集は靈界の希望に端を發して世界平和の希望に筆を收めてゐる。萬世の光である東西聖賢の共に一致するところ、尊きものへの敬畏は著者が特に讀者に鼓吹せんとするところ、神と人道と祖國とは本集の中心觀念であることをこゝに巻頭に宣言するものである。

昭和二年秋

仙臺に於て
土井 林 吉

天地有情

希望	三
雲の歌	四
星と花	九
鷺	一〇
萬有と詩人	一一
はるのよ	一二
哀歌	二三
海棠	二七
無題	二七
詩人	二九
夕の思ひ	三〇
岸邊の櫻花	四一
花枝	四三
夢	四四

目次

夏夜	四六
光	四八
月と戀	五八
夕の星	五九
墓上の花	六〇
暗と眠	六一
廣瀬川	六三
籠鳥の感	六五
馬前の夢	六六
花と星	七九
浮世の戀	八一
登高	八四
夜	八五
小兒	八六

○赤壁圖に題す……………八九
 ○夏の川……………九〇
 ○青葉城……………九一
 別の袖に……………九二
 人の世に……………九二
 紅葉青山水急流……………九四
 枯柳……………一〇一

曉 鐘

✓ 辭 麗……………一四七
 ✓ 萬里長城の歌……………一七〇
 ✓ 花上の露……………一七八
 ✓ 月と水……………一七九
 惆悵吟……………一八〇
 夏の夜……………一八一
 暗と眠……………一八四
 秋興八首……………一八四
 ✓ 岸上の終焉……………一九〇
 ✓ 白桃花……………一九一

造化妙工……………一〇一
 靜夜吟……………一〇七
 哀 樂……………一〇九
 星落秋風五丈原……………一一〇
 夕の磯……………一三四
 暮 鐘……………一三五

✓ 平 和

✓ 弔吉國樟堂……………一九三
 破 船……………一九四
 天 上……………二〇二
 無 限……………二〇四
 黑龍江上の悲劇……………二〇五
 登高賦……………二〇六
 夕の姿……………二一五
 おほいなる手のかげ……………二二二
 不 朽……………二二三

深 淵

故郷の墳墓……………二四九
 ………………二六三

東海遊子吟

✓ 富嶽之歌……………二二三
 ✓ 江上の逍遙……………二四三
 ✓ あげぼの……………二八七
 松 島……………二八七
 亞細亞大陸回顧の歌……………二八九
 瑞 士……………三〇三
 佛蘭西……………三〇四
 土耳其……………三〇六
 日本の女性……………三〇七
 プルジエ湖畔日夜の曲……………三〇八
 アルノ……………三一〇
 フローレンスの遠望……………三一三
 セイヤ江上の別離……………三一五
 タオルミナ希臘劇場……………三二八
 カムパニアの大野……………三三三
 司馬子長名山藏書歌……………三三九
 懷 郷……………三五〇

ノートルダム……………三五五
 ミロのグイーナス……………三五七
 哀 歌……………三六七
 羅馬郊外……………三七三
 羅馬郊外の寺院……………三七六
 深 夜……………三七九
 永劫の戀……………三八〇
 愁……………三八一
 凱 歌……………三八二
 ドナウ江上の吟……………三八三
 サレブ峯頭にて……………三九三
 ライプチヒの記念碑……………四〇一
 バイロン……………四〇五
 歐洲大陸回顧の歌……………四一五

曙 光

釋迦牟尼とトルストイ…………… 四三三
 金華山より太平洋を望みて…………… 四三五
 愛と哀…………… 四四五
 夜…………… 四四六
 雨 滴…………… 四四七
 冥府の白薔薇…………… 四四八
 亡國の恨…………… 四四九
 誓めよ…………… 四五〇
 天 魔…………… 四五二
 危 機…………… 四五三
 長 大 息…………… 四五四
 歐洲戦局詠…………… 四五五
 血潮の狂ひ…………… 四五九
 エルエーレンの祖國の破片…………… 四六三
 無韻の哀歌…………… 四六七
 河内燈…………… 四七〇
 レヒンを憶ふ…………… 四七一

ロマノフの滅び…………… 四七四
 友工會々歌…………… 四七九
 五城寮々歌…………… 四八一
 尙縑女學校々歌…………… 四八三
 木更津中學校々歌…………… 四八四
 北野中學校々歌…………… 四八六
 函館中學校々歌…………… 四八八
 宮城女學校女子青年會々歌…………… 四八九
 科學の光…………… 四九二
 秋山中將を弔ふ…………… 四九六
 川…………… 四九九
 ラファエロの墓…………… 五〇〇
 天才讚頌…………… 五〇二
 小島教授を弔ふ…………… 五〇四
 レウソウの墓…………… 五〇五
 ちさき聲…………… 五〇八
 流 轉…………… 五一一

天馬の道に

南米に行く人に…………… 五一三
 ゲーテのあとを訪ひて…………… 五一四
 同…………… 五一六
 岳陽樓…………… 五一八
 山頂の悲劇…………… 五二一
 スウルヤ…………… 五二九
 太陽の讚…………… 五三三
 富岳登攀…………… 五三七
 わが短歌…………… 五四二
 南歐雜詠…………… 五五〇
 羅馬カピトルの階下に…………… 五五五
 コリゼアム…………… 五五六
 萬國青年會に集る信徒の讚頌…………… 五六〇
 セラリオ…………… 五六三

ガブリエレダメンチオ…………… 五六五
 時は到りぬ…………… 五六六
 遠つ世に…………… 五七〇
 一葉落…………… 五七三
 平和の曙光…………… 五七七
 奸雄の末路…………… 五八二
 西園寺侯に寄する歌…………… 五八八
 光榮の佛蘭西…………… 五九八
 アルマン郷土のスケッチ…………… 六〇七
 岡法學士の米國遊學を送る…………… 六一四
 青春の意氣…………… 六一五
 ベルジアム…………… 六一九
 オウストリヤの運命…………… 六二〇
 弔芳魂…………… 六二二

序 詩…………… 六四一
 おほいなる憐…………… 六六五
 その來る時…………… 六六七

日本の風姿…………… 六六九
 東亞の美術…………… 六七三
 東亞の時局…………… 六七九

天地有情

小山鼎浦を弔ふ	六八一
眞島博士の愛兒を弔ふ	六八七
森村翁の讃	六九〇
板垣退助氏の頌	六九二
一つの死	六九四
大戦の追想	六九七
狂瀾	七〇〇
民よサイレンの聲を恐れよ	七〇五
マチイニに聴け	七〇七
憐める魂	七〇九
東方の聖經	七二二

紺紙金泥寫經	七一四
東方の聖經	七一八
大方廣佛華嚴經	七二二
詩の大海—ダンテ	七二五
レオナルド・ダ・キンチ	七二七
李太白と杜少陵	七三二
ミケランヂエロとラファエロ	七三四
南歐の詩人と藝術家	七三七
ガブリエレ・ダモンチオ	七三八
註	七四四

—終—

序

「或は人を天上に揚げ或は天を此土に下す」と詩の理想は即是也。詩は閑人の囁話に非ず、詩は彫蟲篆刻の末枝に非ず。既往數百年間國詩の經歷に關しては余將た何をか曰はん。思ふに所謂新體詩の世に出てより僅に十餘年今日其穉態笑ふべきは自然の數なり。然れども歲月遷り文運進まば其不完之を將來に必ずべからず。詩は國民の精髓なり、大國民にして大詩篇なきもの未だ之あらず。本邦の前途をして多望ならしめば、本邦詩界の前途亦多望ならすんばあらず。本書收むる所余が新舊の作四十餘篇素より一として詩の名稱を享受するに足るものあらず。只一片の微衷、國詩の發達に關して纖芥の貢資たるを得ば幸のみ。著者不敏と雖も自ら稱して詩人と爲すの僭を學ぶものに非ず。

明治三十二年三月

東京に於て

土井 林 吉

希望

沖の汐風吹きあれて
白波いたくほゆるとき
夕月波にしづむるとき
黒暗よもを襲ふとき
空のあなたにわが舟を
導く星の光あり。
ながき我世の夢さめて
むくろの土に返るとき
心のなやみ終るとき
罪のほだしの解くるとき
墓のあなたに我魂を
導く神の御聲あり。



嘆きわづらひくるしみの
 海にいのちの舟うけて
 夢にも泣くか塵の子よ
 浮世の波の仇騒ぎ
 雨風いかにあらふとも
 忍べ、とこよの花にほふ
 港入江の春告げて
 流るゝ川に言葉あり
 燃ゆる焔に思想あり
 空行く雲に啓示あり
 夜半の嵐に諫誠あり
 人の心に希望あり

雲の歌

ゆふべは崑崙の谷の底

けさは芙蓉の峯の上
 万里の鵬の行末も
 馳けり窮めむ路遠み
 無限のうみわが旅路
 空の大海星のさと
 緑をこらすたなかに
 懸かる微塵の影ひとつ
 見らるゝ湧きて幾千里
 あらしを孕み風を帯び
 光を掩ふてかけり行く
 いかづち怒り風狂ひ
 山河もどよみ震ふとき
 天濤高く傾けて
 下界に注ぐ雨の脚

やめば名残の空遠く
泛ぶ七いろ虹のはし。

曙の紫こむらさき

澄みてきらめく明星の

光微かに眠るとき

覺むる朝日を待ちわびつ、

やがて焔の羽添へて、

中ぞら高くのぼし行く。

しづけき夜半の天空に

ほのめき出づる月の姫、

下界の花を慕ひつゝ

半ば耻らふ面影を

ためにかはむわが情

輕羅の袖と身を代えて。

照りにて萬朶の花霞

花にても勝る身の粧、

あるは歸鳥の影呑みて

ゆふべ奇峯の夏の空、

海原遙か泛びては

紛ふ白帆の影寒く。

織ればわが文春の波、

染むれば巧み秋の野邊。

羽蓋凝りて玉帝の

御駕空に駐るべく。

錦旗かへりて天上の

御遊の列の動くべく。

跡こそ替れ、替りなき

自然の巧わが匂ひ、

巖に鬢く夕暮は

天女羅綾の舞ごろも、
断片風に流れては
われ晴空の孤月輪。

影縹緲の空遠く
ゆふべいざよふわが姿、
無心のあとは有情の
誰が高樓の眺めぞや、
珠簾かすかに洩れいで、
咽ぶ妻琴ねも細く。

千仞高ききり崖の
嶺に聳たつ松一木の
緑の枝に寄りかゝり
風の袂を振ふとき
鳴く音すみて來るたづに
貸さむ今宵の夢の宿。

岸の柳ともろともに
水面に影を宿すとき
江山遠き一竿の
不文のひじり何と見む、
思は清く身は軽く
自在はわれに似たる身の。

自然の姿とこしへに
われは昨日の我ながら
嗚呼函關の紫も
昔のあとぞ遙かなる、
帝郷遠し影白く
泛べば慕ふ友や誰れ。

星と花

同じ「自然」のおん母の

御手にそだちし姉と妹、
み空の花を星といひ
わが世の星を花といふ。

かれとこれとに隔たれど

にほひは同じ星と花、
笑みと光を宵々に
かはすもやさし花と星。

さればあはれの雲白く

御空の花のしほむとき、
見よ白露のひとしづく
わが世の星に涙あり。

鸞

紫にほふ横雲の

露や染めけむ花すみれ、
花に戯るゝ蜂蝶の
戀か恨かうつゝ世の
はかなき春をよそにして
大空のぼる鷺一羽
あらしは寒し道さびし。

春の姿はたへなれど、
花の薫りはにほへども、
其春よりも美しく
其花よりもかんばしき
雲井のをちをめざしつゝ
大空高く鷺一羽、
あらしはきびし道かたし

背には無限の天を負ひ
緑雲はねにつんざきて

飛び行くはてはいづくぞや、
望のあした持ち来る
高き薫りのあとよめて
大空めぐる鷺一羽、
あらしはつらし道すごし。

鳴呼コーカサス峯高く
千重の叢雲むらだちて
下界のひびきやむところ、
天上の火を奪ひ來し
彼のたぐひか青ぐもの
大空翔くる鷺一羽、
あらしははけし道遠し。

萬有と詩人

Atque omne immensum

「渾沌」よさし窮りて
時「永劫」のふところを
出でしわが世のあさぼらけ、
かざしににほふ明星の
光に琴を震はしめて
詩人よ君は歌ひしか。

流るゝ光しづむ影
過ぎし幾世の春秋ぞ、
巖は移り山は去り
淵も幾たび替りけむ、
おほあめつちの美はしき
たくみは今もむかしにて。
あゝわだつみの波の花
銀蛇の飛ぶに似たるかな、

pergravit mente animoque. Lucretius.

仰 け ば 空 に 虹 高 し、
虹 にも 醉 は ぬ わ が こゝろ
波 にも に ぶ き わ が こゝろ
た の む は 獨 り 君 が 歌。

生 け る 焰 の バ プ テ マ
浮 世 の 塵 を 焼 き 掃 ひ、
雲 を 震 は せ 風 に 呼 び
光 に 暗 に 伴 ひ て
大 空 遠 く 翔 り ぐ る
詩 神 の 歌 を 君 聞 く や。

あ さ 日 の 光 ゆ ふ 光
か れ と こ れ と の 染 め 替 ふ る
た く み も よ し や 天 雲 の
輕 羅 の こ ろ も 花 ご ろ も
曳 く や も す そ の 紅 に

詩 神 の 影 を 君 見 る や。

「泉のほとり森のかけ
光てりそふ岡」の
あしたの風の吹くところ
ゆふべの雲のふるところ
露のしづくのふるところ
いづくか歌のなからめや。

流るゝ水のゆくところ
きらめく星のてるところ
緑の草の生ふところ
鶯の翼を振るところ
獅子のあらしに呼ぶところ
いづくか歌のなからめや。

春は吉野のあさぼらけ、

こむる霞のくれなるも
 遠目は紛ふ花の峯、
 夏はラインの夕まぐれ
 流は遠く水清く
 映るも岸の深みどり。
 泪羅の淵のさゞれなみ
 巫山の雲は消えぬれど
 猶揺落の秋の聲
 潮も氷る北洋の
 巖を照すくれなるは
 光しづまぬ夜半の日か。
 路に斃れしカラバンの
 枯骨砕けて塵となり
 魂啾々の恨さへ
 あらしにまじる大沙漠、

もの皆滅ぶ空劫の
 面影君はこゝに見む。

黒雲高くおほ空の
 照る日の影を呑みけして
 紅蓮の焰すさまじく
 巖も熔くる火のみ山、
 あめつちわかぬ渾沌の
 おもかけ君はこゝに見む。

まほろし追ひて疲れては
 しほし野末の假のやど、
 結ぶや君よ何の夢
 さむれば赤したなごゝろ
 あたりの風を匂はして
 笑むはやさしの花ばらか。

涙にあまる思（三）とは
 歌ふをきよぬ野路の花
 荒磯蔭のうつせ貝
 聲なきものを何人か
 海のしらべをこゝろねを
 其一片に聞き（三）にけむ
 たかねの崖に花にほひ
 情波の淵に歌は湧く
 無象を聲に替ふるてふ
 君が心（心）耳（耳）のきくところ
 空のいかづち何をつけ
 夜半のこがらし何を説く
 「眠」の如く「死」の如く
 やさしき鳩の羽たゆく

ゆふべの空に下るごとく、
 詩神の魂の降り来て
 君が心をみたすとき。

夜の薫の高うして
 天地しづかに夢に入る
 うちに聲なく言葉なく
 またく窓のもしびに
 風の姿を眺めては
 思はいかに君の胸。

心の窓も押しあけて
 眺むる空に流れくる
 星の行衛はいづくぞや
 清きアボンの岸のへか
 咲くタスカンの花の野か
 それワイマアの森蔭か。

北斗は遠し影高し、
望の光愛の色、
かれにもしるき参宿の
もなかにひかりかじやきて
(かたどる影は眞善美)
三の星こそ並ぶなれ。

坤輿一球透き通り
仰ぎて上に見るごとく
下にも光る千萬の
星の宿りを眺め得ば
下界の名さへ空しくて
我世いみじと知るべきを。

まことの光まことの美
狭霧に蔽はれとざされて
暗にさまよふわがこゝろ、

たのむは獨り君が歌
紫蘭の薫百合花の色
爲に咲かなん君が歌。

しらべも高くねも高く
あらしきあらしを和けて
微妙の樂に替ふるてふ
君が玉琴かきならし、
涙のうちにほゝるみて
暗のただ中かどやきて。

かのオルビスのなすところ
陰府に繋がる魂を解き、
かのピタゴルの説くところ
御空に星の樂を聞き、
かのプラトンの見るところ
高き理想の夢に酔へ。

(註)

(一) 失樂園第三卷

(二) ナルツナルス

(三) ロセツテ

(四) シエークスピア

(五) ダンテ

(六) グレート

(七) オライオンの星宿

はるのよ

あるじはたそやしらうめの
かをりにむせぶはるのよは
おほろのつきをたよりにて
しのびきゝけむつまごとか。
そのわくらははのてすさびに

すゝろにゑへるひとごゝろ
かすかにもれしともしびに
はなのすがたはてりしとか。
たをりははてじはなのえだ
なれしやどりのとりながむ
おほろのつきのうらみより
そのよくだちぬはるのあめ。
ことはむなしくねをたえて
いまはたしのぶかれひとり
あゝそのよはのうめがかを
あゝそのよはのつきかけを。
哀 歌
同じ 昨日の深翠

廣瀬の流變らねど
もとの水にはあらずかし
汀の櫻花散りて
にほひゆかしの藤ごろも
寫せし水は今いづこ。

心ごとろの春去りて
色ことぐく褪めはてつ
夕波寒く風たてば
行衛や迷ふ花の魂
名残りの薫いつしかに
水面遠く消えて行く。

恨みを吹くや年ごとの
瑞風山の春の風
をのへの霞くれなるもの
色になぞらう花ごろも

とめし薫のはかなさは
何に忍びむ夕まぐれ。

暮山一朶の春の雲
緑の髪を拂ひつゝ
落つる小櫛に觸るる袖
ゆかしゆかりの濃紫
羅綺にも堆へぬ柳腰の
枝垂は同じ花の縁
花散りはてし夕空を
仰けば星も涙なり。

池のさゞ波空の虹
いみじは脆き世の道を
われはた泣かむ花の蔭
其花拂ふ夕風に
蝴蝶の宿を音づれて

問はん昨日の夢いかた。
 春を誘ふて蜂蝶の
 空のあなたに去るがごと
 玉釵砕けて星落ちて
 あはれ芳魂いまいづこ
 残るは枯れし花の枝
 盡きぬは恨春の雨。
 盡きぬは恨春の雨
 ともしび暗きさよ中の
 夢のたゞちをいかにせむ
 ありし昨日の面影に
 變らぬ笑も含ませて
 名におふ花の一枝は
 嗚呼その細き玉の手に。

海 棠

盛りいみじき海棠に
 灑ぐも重し春の雨
 花の恨か喜か
 問はんとすれど露もだし
 聞かんとすれど花いはず。
 タしづかに風吹きて
 名残の露は拂はれぬ
 風の情か嫉にか
 問はんとすれど露もだし
 聞かんとすれど花いはず。

無 題

光玉しく露満ちて
 百合花も薔薇も蘭も
 馨あふるる園あらば
 君が踏み行く路とせむ。
 流るゝ花を誘ひては
 海原遠く香をはこぶ
 清き野中の川あらば
 君がかよみの水とせむ。
 夕の空に現はれて
 微笑める光に塵の世を
 慰めてらす星あらば
 君がかざしの珠とせむ。
 清くたふとく汚なく
 戀も涙も憐も

みつるやさしの胸あらば
 君が心の宿とせむ。

詩 人

詩人よ君を譬ふれば
 戀に酔ひぬるをとめごか、
 あらしのうちに樂を聞き
 あら野のうちに花を見る。

詩人よ君を譬ふれば
 世の罪しらぬをさなごか、
 口には神の聲ひよき
 目にはみそらの夢やどる。

詩人よ君を譬ふれば
 八重の汐路の海原か、

おもてにあるゝあらしあり
 底にひそめるまたまあり。
 詩人よ君を譬ふれば
 雲に聳ゆる火の山か
 星は額にかゞやきて
 焔の波ぞ胸に湧く。
 詩人よ君を譬ふれば
 光すゞしき夕月か
 身を天上にとめ置きて
 影を下界の塵に寄す。

夕の思ひ

“Où va l'esprit dans l'homme?
 Où va l'homme sur la terre?”

Seigneur! Seigneur!

Où va la terre dans le ciel.

—Hugo; Les Feuilles d'Autopne.

“O life as futile, then as frail!
 O for thy voice to soothe and bless!
 What hope or answer, or redress?
 Behind the veil! behind the veil!”
 —Tenn, son: In Memoriam.

思入(一) 日を先立て
 たそがれ近き大空に
 うかびいざよふ雲のむれ
 暮行くけふの名残とて
 見るめまばゆきあやいろを
 染むるは何のわざならむ。

あるは幾重の空のよそ
 あるは幾重の嶺のうへ、
 かるく流るゝくれなるは
 セラフ、ケラブの旗を見せ、
 ゆるく震びくむらさきは
 あまつをとめの裾や曳く。
 タ々々の空の上
 變る百千の面影を
 變らぬ愛に眺むれば
 たゞ聯想の端となる
 雲よ自在のはねのして
 いづくのはてに翔り行く。
 あゝ夕雲のかけりゆく
 空のあなたぞなつかしき、
 心の渴きとゞむべき

そこに生命の川あらむ
 眞理のかどを開くべき
 そこに秘密の鍵あらむ。
 嗚呼夕雲のはねのうへ
 たれか「涙の谷」棄てゝ
 荒鷲翔り風迷ふ
 空のあなたに飛行かむ、
 浮世の暗に知られざる
 光はそこに照るべきを。
 花より花にむれとびて
 蜜を集むる蜂のごと、
 星より星に光をと
 飛行く魂を眺めけむ、
 詩人のくしまぼろしを
 たれかうつゝに返すらむ。

消えしエデンの花園の
 おもわは今も忘れず、
 ほす味にがきさかづきの
 底なる澱に酔はんとて
 塵の浮世に塵の身は
 かくもいつまで残らむ。
 涙の谷にさまよひて
 ねぬ夜の夢に驚けば
 こゝにバイロン血に泣きて
 「死と疑の子」となのり、
 こゝにシルレル聲あけて
 「理想は消ゆ」と叫ぶかな。
 アポンの流しづかにて
 すゞしく月を宿せども

見えぬそこひに波むせび
 グラスメヤアの水面にも
 うつる此世の影見れば
 たゞ海神のなつかしや。
 さればラインの岸遠く
 思をこめて人は去り、
 ゼネワの夏の夕暮は
 よその恨の歌を添へ
 深き嘆はナポリなる
 波も洗ひや得ざりけむ。
 波に照れとて空の月
 花に舞へとて春の蝶
 「自然」のわざは妙ながら、
 世に苦めと塵の身を
 暗に迷へと玉の緒を

つくる心のしりがたや。
 かゞやく夢に空かざり
 玉しく露に地を粧ふ
 神にたづねむいかなれば
 なまじの絆人の子の
 心に智慧の願あり、
 胸(三)に悟の望ある。
 荒れのみまさる人の世に
 せめては匂ふ戀の花
 脆きはたれの咎ならむ、
 夢の眸月の眉
 たゞ思出の種とし
 いづく消行くまほろしぞ。
 母の乳房にもたれつゝ

宿すもゆかし春の夢
 見なば魔王もゑみぬべき
 稚子の眠もひとゝきや、
 やがて寄來ん世のあらし
 つらきあらしのさますらむ。
 つらきあらしを譬ふれば
 陰府なる門の軋かも
 脆き弱きをにへとして
 いけるをきほふ世々の聲、
 うちに恨の叫あり
 うちに憂の涙あり。
 民のもゝちの骨枯れて
 ひとりのおさを成ると説く、
 それにもまして痛はしき
 人の嘆と悲と

涙と血とに買はれたる
 この世の榮はたがためぞ。
 時劫の潮とこしへに
 寄するあら波返る波、
 浮きて沈みて末つひは
 たゞうたかたのよゝのあと、
 いづれの時かいつの世か
 亂れ騒ぎのなかりけむ。
 世界の富を集めたる
 ローマの榮華夢と消え、
 こがね鑲め玉しきし
 ニネブ、バビロン野と荒れて
 砂上につきしバベル塔
 今はた何を残すらむ。

嗚呼人榮え人沈み
 國また起り國亡び
 かくて廻りて極みなく
 かくて流れてはてしなく
 時よ浮世よいつちより
 時よ浮世よいつちゆく。
 ひとり思にかきくれて
 たゞずむ影もるる雲も
 消えてむなしき夕まぐれ、
 神の慈愛のまなじりか
 みどり澄みゆく大空に
 はやてりそむる夢のかけ。
 あゝなつかしの星の影
 夢と過行く人の世に
 猶「永劫」のあと見せて

あめとつちとの割れけむ
むかしのまゝにとこしへに
わかき光に匂ふかな。

其 永劫の面影を
仰 げば 我に 涙あり
高 くと ぶとく 限りなき
靈の いぶきに 扇がれて
空の あなたに かけとむる
「望」のあとに 喘ぎつゝ。

天には 光地には 暗、
あひに さまよふ 我思ひ、
浮世の 憂を 吹寄せて
あらし 叫びぬ 「惱よ」と、
神の 光榮を ほのみせて
星さゝ やきぬ 「望よ」と。

(註) (一) ダンテ「神曲」中「天國篇」を見よ。

(二) シエーガスピアの故郷の川。

(三) ウォルツウナルス住所の傍にありし湖。

(四) プロテアス及びトライトンを指す。有名なる。 “World is too much for us” の歌を見よ。

(五) 「チャイルド、ハロード」第三篇第五十

章及其續きを見よ。

(六) ラマルティーン此處にバイロンを見後
日常時を泊想して「人間」と題する沈
痛悲壯の詩を詠す。

(七) シェリーの “Stanzas written in de-
jection, near Naples.”

岸 邊 の 櫻 花

春 靜 かな る 里 川 の

岸の影へ匂ふ花櫻、
水面の影にあこがれて
涙灑けける幾たびか。

おのが影とも花知らず
光のどけき朝日子に
姿凝らしめて水面を
あゝ幾度か眺めけむ。

影ものいはじ水去りて
いつしか老ゆる花の面
うつらふ色を眺めては
思やいかにか夕まぐれ。

春も空しく暮去れば
梢離れてあゝ花よ
水面の影と逢ひながら

行くゑはいづこ末遠く。

花 一 枝

ラインの岸に花摘みて
別れし友に贈りけむ
詩人を學びわれもまた
君に一枝の夕ざくら。

あしたの柳露にさめ
ゆふべの櫻風に酔ふ
都の春の面影を
せめては偲べとばかりに。

通ふ鐵路も末遠く
都の春は里の冬
玉なす御手に觸れん前

萎み果てむかあゝ花よ。
萎み果てなむ一枝を
空しく棄てむ君ならじ
心の色に染めなして
寢覺の窓にえましめよ。

夢 (題 畫)

韓紅の花ごろも
燃ゆる思とたきこめし
蘭麝の名残匂はせて
野薔薇散り浮くいさゝ川
流の水は浅くとも
深し岸邊の岩がねに
結ぶをとめの夏の夢。

よその高峯の夕霞
何にまがへてたどりけん
羅綾のしとね引換へて
今は緑の苔むしろ、
水とこしへに流去り
花いつしかと散りぬれば
夢か昨日の春の世も。
のほる朝日に照りそひて
色なき露も色にほふ
眺めまばゆきあさぼらけ、
若葉のみどり夏深き
梢はなるゝもゝ鳥は
我世たのしと鳴くものを
さめずやあはれをとめごよ。
鳴くや杜鵑のひと聲に

五月雨いつかはれ行けば
 ちぎれくの雲間より
 やがてほのめく夏の月、
 銀輪露に洗はれて
 我世すよしと照るものを
 さめずや哀れをとめごよ。
 螢飛びかふ夕まぐれ
 すゝ風そよぐ夜半の空
 流れ流るゝ谷川の
 水の響はたえねども
 水の行くゑは替れども
 覚めずやあはれ汝が胸に
 燃ゆる思の夏の夢

夏 夜

静けき夏の夜半の空
 遠き蛙の歌聴けば
 無聲にまさるさびなれや
 眠を誘ふ水の音
 心しづかに流るれど
 夕月山に落ち行けば
 影を涵さんよしもなし。
 星夜の空の薄光
 心を遠く誘ひつゝ
 すゝしくそよぐ風のねは
 神のかなづる玉琴に
 觸れてやひびく天の樂、
 昨日の夢と悲みし
 浮世の春は替はれども
 見ずやとこよの春の花
 散らずでしほまで天空の

星のあなたにほゝるむを。

光

“Hail, holy Light,
of spring, of Heaven first-born,
Or of the Eternal coeternal beam!”

—Milton.

くしき天地の靈となり
我世にありて道となり
心にありて智慧となり
迷を破り暗を逐ひ
望をおこし愛を布く
光仰ぐもたふとしや。
清くいみじく比たぐひなく

おほ空高く星に照り
下かんばしく花に笑み
虹のなゝ色ちごのため
西の夕榮老のため
染むる光のたふとしや。

高きは山か山よりも
清きは水か水よりも
露はうるはし露よりも
花はかぐはし花よりも
すぐれてくしき比なき
光仰ぐもたふとしや。

水の初めて湧くがごと
ちごの産聲擧ぐるごと
シオンの琴の震ふごと
天使の空を飛ぶがごと

とはに新たにまことなる
光仰ぐもたふとしや。

アルファ、オメガを身に兼ねて
今あり後あり昔あり、
妙華花咲く池の岸、
シナイ雲湧く峯の上、
彌陀もエホバもこしへの
光のうちにはほゝるみぬ。

獨り我世に許されし
光のあとを眺むるも
夜は千萬の星の色、
あけぼの白く雲われて
明星のまみ閉づるとき
照るもまばゆし旭日影。

緑しづけき峯の上
いみじく笑めるさま見れば
「神のうひご」ぞ偲ばるゝ、
魔界の旅の終るとき
ふたりの道にあらはれて
照らすは清き朝の波。

暮は遠やま西の山
「浮世もやすめ」夕光
くれなる染めて沈むなり、
かくや命の消えんとき
かくやむくろを抜け出て
魂の他界に去らんとき。
夜の黒幕たれこめて
微かに星のきらめくを
焰の海と誰か知る、

空か かんばしく 花降りて
 行く 大水の音のごと
 響く は 天の愛の歌
 流るゝ 霞く ねなるの
 春とこ へに 若うして
 風は 優鉢羅の花の香か
 嗚呼 美しいのまぼろしよ
 現実の あらしつらければ
 かざし の花の露のごと
 脆く 砕けて 跡ぞなき
 今わが 歸る人の世に
 夢は 空しきものなりき
 兩羽 鋭くあまかける
 天馬の 鞍に堪へかねて
 下界に 落ちし塵の子よ

光まばゆき 照る日影
 無限の 空の 大海の
 一しづく と誰か 見る
 照る日照る 日の限なき
 碧りのをちのおほ空は
 光の流 色のおほ波
 溢れぬ 隈もなかるべく
 あらし 耀き 風てりて
 百重の 綾も 織りぬべく
 そのおほ空の たゞなかに
 わが 想像の 見るところ
 緑は 消えて 金色の
 光まばゆし 天の關
 百千の 寶鏤めて
 鏤なす かどを 過ぎ行はば

恨はあはれなれのみか、
まほろし消えて力なく
今こそ咽べ我琴も。

こゝの光に暗まじり
こゝのうま酒にがし、
こゝなる戀に恨あり
こゝなる歌に涙あり、
「自然」は常にほゑめど
世は長への春ならず。

花は光に鳥は香に
いざよふ雲は夕づゝに
そよふく風は朝波に
交すは愛のことのはか、
「自然」は常にほゑめど
世は長への春ならず。

見よや緑の川柳
更けて葉越しに青白く
片破月の沈むとき、
見よやみそらに影曳きて
怖ぢ驚ける魂のごと
流るゝ星の落つるとき。

夢より淡く「北光」の
光微かに薄らぎて
氷の山にかゝるとき
あるは斗牛の影氷る
悲しき光波のへに
破船の伴の望むとき。

夕暗空に聲もなく
影もわびしく稲妻の
またゝくひまに消ゆるとき、

誰か憂に閉されて
 望む光の淋しさにて
 我世の様をたぐへざる。
 もよとせ千歳秋去らば
 樂土は實となるべしや、
 人と人と人の争に
 我世の惱絶えざらば
 花たが爲めの薫ぞや
 星たが爲めの光ぞや。
 弱き脆きをしへたぐる
 あらびを見るもいつまでか、
 悟の光暗うしめて
 時の徴候は分かねども
 望めわが友いつまでか
 「力」は「正」に逆ふべき。

さればうき世の雲は晴れ
 つるぎは銷けて天日の
 光と照らんあさぼらけ、
 人の心に恨なく
 邦の間に怒なく
 我世の上にあらびなく—
 愛と自由と平等の
 まことの光かどやきて
 天の王国來るとき、
 嗚呼其時をまちわぶる
 友よもろとも手を引きて
 薄暗の世をたどらまし。

(註) (一) ミルト 失樂園第三編

(二) ダンテ淨罪界第一章

(四) ベラロホン

(五) 「オーロラ、ポレアリス」

月 と 戀

寢 覺 め 夜 深 き 窓 の 外
 し ば し 雲 間 を 洩 れ い で て
 静 か に 忍 ぶ 影 見 れ ば
 月 は 戀 に も 似 た り け り
 浮 世 慕 う て 宵 々 に
 寄 す る 光 の か ひ や 何
 叢 雲 厚 く 布 き 満 て ば
 戀 は あ だ な り 月 姫 よ
 あ だ な る 戀 に 泣 く 子 ら の
 手 に 育 ち け む 花 の ご と
 色 青 白 う 影 や せ て
 隠 れ も 行 く か 雲 の 外

夕 の 星

ち ぎ れ く に 雲 迷 ふ
 夕 の 空 に 星 ひ と つ
 光 は い ま だ 浅 け れ ど
 思 深 し や 天 の 海
 嗚 呼 カ ル デ ア に 牧 び と の
 な れ を 見 し よ り 四 千 年
 光 は と は に 若 う し て
 世 は か く ま で に 老 い し か な
 ま た く 光 露 帯 び て
 今 は た 泣 く か 人 の た め
 つ か れ 争 わ づ ら ひ に
 我 世 の 幸 は 遠 け れ ば

墓 上 の 花

死と悲と恨との
 跡を留むる墓の上の
 美と喜と命との
 心を示す花一つ。
 光あけぼの、來ん年日、
 望の影を彼は見せ
 暗、夕まぐれ、過ぎし年、
 涙のあとを此は見す。
 色ある花の聲や何
 聲なき墓の意味やなに、
 同じあしたの白露を
 彼と此とに落ちしめよ。

憂の墓は人のあ
 命の花は神のわざ、
 同じ夕の星影を
 彼と此とに照らしめよ。

「暗」と「眠」

夕暮迷ふ蝙蝠の
 羽音にそよぐ川柳
 其みだれ髪わかねつゝ
 「暗」と「眠」とつれだちて
 梢しづかに降りけり。
 墨ぞめごろも裾長く
 「暗」の歩みに音もなし、
 ふり蒔く露は見えねども
 「眠」の影のさすところ

人のまぶたは重かりき。
過ぐるを憶ふ悲みに
來ん日を計るわづらひに
ひと日のわざは足るものを
「暗」よ「眠」よたづね來て
休みを賜へ人の子に。

嗚呼罪あるも罪なきも
喜ぶものも泣くものも
現の夢を逃れ來て
「暗」のころもを纏へかし
「眠」の露に浸れかし。

星宵の空に聲もなく
よさしは今と佇めたる
「暗」と「眠」の影ふたつ

あまねき恵み人の世に
たるゝいましのなつかしや。

廣 瀬 川

都の塵を逃れ來て
今わが歸る故都の
夕涼しき廣瀬川
野薔薇の薫り消え失せて
昨日の春は跡も無き
岸に無言の身はひとり。

時をも忘れ身も忘れ
心も空に佇めば
風は涼しく影牙え
雲間を洩るゝ夏の月
一輪霞む隴夜の

花の夢いまいづこぞや。
 憂よ思よ一春の
 過ぎて跡なき夢のごと、
 にがき涙もおもほへば
 今に無量の味はあり、
 浮世を捨てゝおくつきの
 暗にとこしへ眠らんと
 願ひしそれも幸なりき。

流はゆるし水清し、
 樂の、光の、波のまに
 すゞしく澄める夜半の月、
 自然の心こゝろにて
 胸に思のなかりせば
 樂しかるべき人の世を。

籠鳥の感

嗚呼青春の夢高く
 理想のあとにあこがれて
 若き血汐の躍るとき
 人も自在の翼あり。

自在の翼また伸びず
 現の籠に囚はれて
 餌に鳴音を搾るとき
 狂ふ叫を誰か聞く。

狂ふ叫もしづまりつ
 籠を天地と眺めては
 御空のをちも忘れむ
 理想の夢もさめ果てむ。

こゝに囚はれこゝにやむ
 あだし命の一時や、
 うたてうたかたうつゝ世を
 我嘆かんや笑はんや。

馬前の夢

“Etre d' un siècle entier la pensée et la vie,
 Enousser le poignard, décourager l' envie,
 Et ranter, raffermir l' univers incertain,
 Aux sinistres clartes de la foudre qui gronde,
 Vingt fois contre les dieux jouer le sort du monde.
 Quel réveil ! et ce fut ton desin !”

Lamartine : Nouvelles Méditations.

おほ空涵すわだの原
 波間の星は影消えて

天地をこむる暗の色、
 暗を掠めて夜あらしは
 時こそくれと狂ふなる
 魔神の叫ものすごや。
 やがて降りくる雨の音
 雨に答ふる波の音
 銀山碎け飛び散りて
 暗にもしるき汐烟
 白衣の幽鬼群りて
 よみに迷ふに似たるかな。
 風雨いよく荒れ行きて
 四大のあらび渾沌の
 世の有様もまのあたり、
 夜の惱をいやまし
 雷車亂るゝ雲の上

魔炎の光たれか射る。
 嗚呼すさまじき雨の夜、
 あらしも波も聲あけて
 歌ひ弔へはなれ島、
 至尊の冠いたゞきし
 かしらは今はうなだれて
 かれにいまはの床にあり。
 疵に悩みて砂原の、
 月に悲しむ荒獅子か
 檣折れてわだつみに
 沈み消行く大船か、
 紅蓮の焰しづまりて
 雪に掩はるゝ死火山か。
 馴れ來し邦を、とも人を

隔てゝ遠き離れじま、
 都の春の一夢を
 磯のあらしにさまさせて
 氣は世を蓋ふますらは
 いまはの床に眠るかな。
 名は一代の史をまとめ
 身は全歐の權を統べ
 嫉むを挫き仇を撃ち
 暗と光のおほ波を
 世に注ぎしも二十年、
 今はた狂ふ雨の夜
 あらしに魂の迷はんと
 思ひやかかけし神ならで。
 十萬の鐵馬アルベラの
 あらしを蹴りて駆けし後

三千の精騎ルビコンの
 流亂して越えし後
 彼に比べんものやたぞ
 群山遠く下に見て
 空に聳ゆるアルプスの
 高きは君の名なる哉。
 断頭臺の血を瀉ぐ
 革命の波推しわけて
 現はれいでしタイタンの
 まばゆき光照らすとき
 「民主自由」の聲いづこ
 渦く時の高しほを
 しばし隻手にとどめけむ
 猛きは君の威なるかな。
 そら舞のぼる蛟龍の

黒雲集め雨を驅り
 風に嘯き呼ぶがごと
 山を震はせ海を干し
 進める君が行先を
 拒ぎとどめしものやたぞ。
 颶風の翼身に借りて
 征塵高く蹴たつれば
 脆く亂るマメリユーク、
 奔るを逐うて呼ぶ聲に
 四千餘年の幽魂は
 覺めぬ巨塔の墓の下。
 サン、ベルナアの嶺高く
 雲満山を埋むれば
 響は凄しアパランチ、
 難きをしのぎ嶮を越え

見おろす大野草青く
 馬は肥えたりマレンゴウ。
 オーステリツの朝風に
 同盟軍の旗高し、
 至尊の指揮に奮立つ
 二十餘萬の塊魯軍
 君の鋒先向ふとき
 散りぬ嵐に葉のごとく。
 イーナ、ワグラム雲暗し
 フリードランド風荒し、
 いかづち落つる砲彈の
 渦巻く烟かきわけて
 君がかざせる驚の旗、
 飛電のつるぎ閃けば
 列王つちに膝つきて

見よもろくの國たみは
 震ひどよめり海のごと。
 セイヌの流静かなる
 岸の柳の浅みどり、
 みどりの空に聳立つ
 凱旋門は高くとも
 君のみいづにたぐへんや、
 みかどの還御壽きて
 歡呼の聲は雷のごと
 バリ滿城の春の歌。
 花ひと時の香にほふ
 脆きはいづれ世の定め、
 富もほまれもみいづるも
 とはの契りをいかせむ、
 「不能」の文字を笑ひしも

嗚呼君遂に神ならず。
 玉樓の春短くて
 魚龍淋しき秋の水
 花はうらがれ香は消え
 ほまれの星も落行けば
 君蓋世の勇いづこ
 焔は狂ふモスコウ府
 吹雪は亂るボロヂノウ。
 フランス國の金笏か
 ロムバアデイの鐵冠か
 全歐洲の大權か
 榮華のはてと今ぞ見る
 夕日の影はクレムリン
 なれが淋しき塔の上。

名残りの光まばゆくも
 雲をつんざき現はれし
 ウオトタアローの丘の上
 敗れも何か恨むべき
 見ずやかなたの金獅像
 語るは敵の勝なりで
 君がいまはの勇みなり。
 光りわたらぬ隈もなき
 其常勝の劔折れて
 獨り小じまの波枕
 夜毎の夢もあかつきの
 千鳥の聲にさめし時
 君や悟れる「命なり」と。
 「悟り」よいづれ「薄命」の
 途に受くべきあだし名か、

月日は空にかよやけど
 塵の惱みをしづめ得じ
 とはに光の消ゆるとも
 盲目は見るを忘れんや
 夕 幾 度 波 の 上
 錦をひたし綾を布く
 入日の影の消えし時
 沖より寄する暮の色に
 心の暗も交はりし
 君が無量の感いか
 月日の流れ世のさだめ
 返らぬ昔今更には
 忍ぶ思の數々
 たゞ大潮の湧くがごと
 夜の黒幕の垂るゝごと

胸に通ればくろがねの
 猛き心も亂れずや。

惱む思を静めむと
 謝せよ歩みの音かろく
 今こそ寄する死の影は
 あはれいまはの床の上
 まだしづまらぬ魂の
 夢はいづこを驅くるらむ。

生れし里は波のいづこ
 なれし都は雲の幾重
 離れ小じまの雨の夜に
 過ぎにし榮は火のごとく
 いまはのあとは灰のごと
 其喜も悲も
 むくろと共に葬りて

眠につけや夢もなく。
 雨とあらしの樂のねに
 こゝに有象いざなの海恨み、
 惱める魂たまを導きて
 かれに無象むざなのかど開く、
 苦む「影」に休やすみあれ
 罪と惱なごみを葬りて
 あゝ比ひなくかんばしき
 ほまれは彼の墓はかにあれ。

(註) (一)アレキサンダー大王大に波斯軍を敗
 りし地

(二)ゴールの歸途シーザアの渡りし河

(三)ピラミッド戦争に敗れし士兵

(四)アルプス山中の峻路、所謂セイント、
 ベルナードの嶮

(五)伊太利にあり、埃兵大敗せし戰場

(六)埃魯の聯軍こゝに大敗す

(七)ワグラム埃軍敗れ、イエーナに魯軍
 敗る

(八)魯軍大敗の地、以上はナポレオンの
 最も光榮ある戦勝地なり

(九)征魯軍退陣の途、こゝに風雪の難初
 まる

(一〇)モスコウ府内の宮殿、ナポレオン
 こゝに陣を取る

(一一)ウオーターアロウ丘上同盟軍凱勝の
 紀念として金獅の像を建つ

花 と 星

ゆふべわが世を見おろして

星は語りぬ「あゝ花よ
憂のしづくつらからば
とはに喜盡きせざる
大空高く昇らずや」。

しほれしおもわ振りあけて
花は問ひけり「あゝ星よ
とはに喜び盡きずてふ
みそらのやちや涙なき」
星はいらへぬ「あらずかし」

「涙あらずは戀あらし」
花はいなみぬうつむきて
「わが世の憂さもあれや
とはに喜び盡きずとも
戀なき里をなにかせむ。

浮世の戀

ゆふべ思にかきくれて
眺むる空の雲幾重
紅染めし夕榮の
色いたづらに消果て
畫くは何の面影ぞ
流るゝ光沈む影
傾く齡手の中に
嗚呼ひきとめむすべもがな。
佛は説きぬ娑羅双樹
祇園精舎の鐘のねも
その曉に綻びし
別れの袖をいかせむ
更けてくるしむ待宵の

涙なみだに數添へて
さても浮世の戀ぞ憂き
さても我世の戀ぞ濃き。

名残の袖の追風の
行衛いづくと眺むれば
春やむかしの川柳
緑のおぐし今更に
ふけて亂れて絆れては
鏡も何ぞいさ川
見ずや踏入る一足に
こゝも移ろふ世の姿。
里飛びたちし鶴の子が
去りて歸らぬ松一株
花なき色は變らねど、
枯れては恨む糸櫻、

吹くや淋しき、すさまじき
幾代浮世の風のねに
命の汀眺むれば
寄するも憂しや老の波。

その仇波の寄せぬまに
花のかんばせ星のまみ
燃ゆる思と熱き血と
そのまゝ共に消えよかし、
願空しきとこしへの
不變の戀よ不死の美よ
詩人の夢をいかにせむ、
天使の幸をなにとせむ。

虹の七色空の色
染むるかしばしうたかたを
旭日の光てらすとき、

あゝ喜かまがつみか
幸か恨か分かねども
戀よ我世の春の夢
さめなばよみの門口に
「生ける屍」を誘へかし。

登 高

烟は沈み水咽ぶ
五城樓下の夕まぐれ
高きに登り佇めば
遠く悲雷の響あり
心の空に吹き通ふ
風の恨に誘はれて
色こそ悼め夕雲の
嶺に歸るもなつかしや。

十年は夢かまぼろしか、
時の流は絶えねども
レイズの水は世に湧かず、
むかしの思忘れられで
今はたこゝにわれ一人
夕日の前に佇めば
染むとも見えぬ秋の色に
山々高し水遠し。
*冥府の川、此の水を飲めば萬事を忘るとい
へり

夜

あらしを孕む黒雲に
吐かれて出でし夜半の月
よみの光をほの見せて
片破の影ものすごや。

見えぬ翼に「時」飛びて
 迷を散らし夢を捲き
 街に烟るともしびは
 暗に疲れて眠り行く。
 我世の涙そらの露
 含みて星も隠れ行く
 心の暗に照らざらば
 消えよ光の效やなに。
 神に問はなむぬばたまの
 「夜」のもすそに包まれて
 咽ぶ涙は幾何ぞぞ
 静けき夢は幾何ぞぞ。

小 兒

くしく妙なるあめつちの
 何に譬へむをさなごよ
 清きいみじき美しき
 汝がこゝろねを面影を。

薫るさゆりの花片に
 おくあけぼの、白露か
 緑色こき大空に
 照るくれなるの夕づゝか。

霞の裾に波絶えて
 静けき春のあさなぎか
 雲雀の床と萌えいでゝ
 野邊をいろどる若草か。

我世の秋の寄するとき
 紅にほふかんばせに

愛の光をかきよやかす
 なれはのどけき春の目か。
 我世のあらしある、時
 蕾とまがふ唇に
 天女の歌を響かする
 汝はそれ生ける音楽か。
 人のわびしく老ゆる時
 こゝろときめく口づけに
 若きいのちを吸はしむる
 なれは盡きせぬとよみきか。
 人の愁にしづむ時
 息柔かくあたゝかく
 樂土の風を匂はする
 汝はとこしへの花の香か。

赤壁圖に題す

首陽の蕨手に握り
 泪羅の水に釣らむ、
 やめよ離騒の一悲曲
 造化無盡の蔵のうち
 我に飛仙の術はあり。
 五湖に今似る蘭の楫
 眺めは廣し風清し
 きのふの非とは誰れかいふ
 松菊庭にある、とも
 浮世の酒もよからずや。
 月江上の風の聲
 むかしの修羅のをたげびの

かたみと残る秋の夜や
軽きもうれし一葉の
船蓬萊にいざさらば。

夏の川

野薔薇にほひて露散りて
夕暮淋しいさゝ川、
心の空に消残る
昨日の春を偲ぶれば
いかに恨みむあゝ夏よ。
螢流れ水すみて
夕暮涼しいさゝ川、
心の空の浮雲を
拂ふ涼かぜ音さえて
いかに戀せむあゝ夏よ。

漣織りて月照りて
夕暮たのしいさゝ川、
流れく水に
秋も近しと眺むれば
いかに惜しまむあゝ夏よ。

青葉城

秋はうつろふ樹々の色に
名のみなりけり青葉山、
圖南の翼風弱く
恨は長く名は高き
君が城あと今いかに。
弦月落ちて宵暗の
星影凄し廣瀬川
恨むか咽ぶ音寒く

川波たちて小夜更けて
秋も流れむ水遠く。

別の袖に

別れの袖にふりかゝる
清き涙も乾くらむ
血汐も湧ける喜の
戀もいつしかさめやせむ、
物皆移り物替る
わが塵の世の夕まぐれ
仰げば高き大空に
無言の光星ひとつ。
梢離れて雪と散り

人の世に

母なる土に還り行く
花のころは誰か知る、
散りなば散りね人の世に。

汀を洗ひ瀬に碎け
流れくゝて海に入る
水のころは誰か知る、
去りなば去りね人の世に。

昨日くれなる花の面
今日はたかしら霜の色
時のころをたれか知る、
移らば移れ人の世に。

かたみにしぼる憂なみだ
袖もいつしか乾くらむ
戀の心をたれか知る、

替らば替れ人の世に。

紅葉青山水急流

«Er ist dahin, der süsse Glaube
An Wesen die mein Traum gebar,
Der rauhen Wirklichkeit zum Raube
Was einst so schön, so göttlich war.»

—Schiller: Die Ideale

桐の一葉をさきだて、
浮世の空に音づれし、
秋は深くもなりにけり。
蟲のねほそる秋の野を
染めし昨日の露霜や
萩が花ずりうつろへば

移る錦は夕端山
思入る日に啼く鹿の
紅葉織りなす床の上。

谷間は早く暮行けど
入日の名残しばとめて
にほふをのへの夕紅葉、
花のあるじにあらねども
山ふところのしら雲に
契るやいかの夜半の宿。
千尋の谷の底深く
流るゝ川のみなもとは
いづく幾重の嶺の雲
玉ちる早瀬浪の音
都の座に遠ければ
耳を洗はむ人も無く。

雪より白きたれぎぬを
 峡山おろしに拂はして
 岸にたゞずむかれやたそ
 巫山洛川いにしへの
 おもわを見する乙女子は
 浮世の人か神の子か
 かたへにたてる若人の
 汀につなぐ舟一葉
 浮世の波に漕ぎいづる
 名残は盡きず今更に分
 ちかねたる袖の上
 涙も露もしけくして
 「清き水面に塵もなき
 君はみやまのいさゝ川
 砕け流れて世にいづる

われははかなき落瀧津
 同じひとつの水筋も
 別れて遠し本と末。

「高嶺の花に誘はれて
 分け來し袖も薫りけむ
 紅埋む夕霞
 緑糸よる玉柳
 深山の奥に君見れば
 武陵の里もよそならじ。

「八重だつ雲に世をへだて
 過ぎこし月日いかなりし
 横雲わかるしのゝめに
 きくは雲雀の春の歌
 霞む川邊の夕暮に
 訪ふは董の花の床。

「未來の空のたのしくて
ゑひしもはかな春の夢、
浮世の憂を吹送る
あらしの音に驚けば
ゆふべの雲はあとなくて
野にも山にも秋はきぬ。

「塵のむくろによしなくも
やどる思のなかりせば
今の嘆のあるべしや、
見しよの夢を呼び返す
みそらの風は吹絶えて
恨はつくくる時ぞなき。」

くづをるさまはあらねども
哀れをこむるまなじりに
帯ぶるや露の玉かつら

かしらを垂れて乙女子は、

「定まる道にすべもなく、
深山に君をとどめ得じ、
定離のためし顧みて
心なしとな恨みそよ。

「とこよの花のさきにほふ
神の御園を閉されて
かどにた、ずむ罪人に
風吹送る天の樂、
泣きてき、けむいにしへの
ためしをあはれ思はずや。

「いさゝ小舟に棹さして
漕行く末も程遠き
君が船路の楫まくら、

寢覺の月の影さえて
風凄まじき夜なくは
思ひもいでよ我が里を。

一長き船路の盡きん時
あらしのやまん時
波も霞の磯ちかく
散りくる花のふよきもて
繁く小舟のとま葺きて
またも逢見ん折をこそ。

さらばとばかり夕浪も
咽ぶ恨のせゝらぎや、
霧たちこむる谷川は
跡見返れどかひぞなき
浮世の秋ももろとも
流れ流れて末遠く。

結 柳

沈む夕日を見送りて
佇む岸のかれやなぎ、
消えぬすがたはつらくとも
しばしは忍べ程もなく
暗のころもに包ませむ
下ゆく流水瘦せて
咽ぶも悲し秋の聲。

造 化 妙 工

嗚呼うるはしき天地の
たくみをいかにたへまし
月日めぐりて年行きて
かゆるいくそのけしきぞや。

春の歩みのつくところ
 地に花薫り草いろひ
 春の呼ぶ吸のゆくところ
 空に蝶舞ひ鳥歌ふ
 清きは夏の夕河原
 涼しき眺見よやとて
 空に月照り風そよぎ
 地に露結び水ながる
 しぐれも雲も時めきて
 秋の夕の色よはた
 谿は紅葉のあやしき
 巖は妻戀ふ牡鹿の音
 冬はあしたのあけいろ
 色無き空に色ありて

雪の梢に梅薫り
 梅の梢に雪かゝる

嗚呼つくしき天地の
 たくみをいかにたへまし
 同じ一日の空合も
 移るいくその眺めぞや

天のはてより地のはてに
 光と暗を布き替て
 こゝに十二の晝の時
 かれに十二の夜の時

薄紫によこぐもの
 たなびくひまを眺むれば
 いろなる露を身にあびて
 笑みつ生るゝ「あした」あり

落る日を呑み月を呑む
 高きは山の姿かな。
 春の霞も秋風も
 共通路の沖遠み
 潮逆捲き波躍る
 廣きは海のおもてかな。
 黒煙高くなびかせて
 麓の里の日を奪ひて
 紅蓮焰の波あけて
 星なき暗の空をやく
 火山の姿君見ずや。
 千年つみこし白雪を
 凍れるまゝにさかおとし
 八百重の嶺を打越して

紅さむるかけるふの
 光のおちを見渡せば
 霞の袂ふりあけて
 鳥呼びび返す「夕」あり。
 時雨の後は虹にほひ
 虹の後は月にはほひ
 月はた遠く落行けば
 あなたに明けの星あかし。
 嗚呼おほいなる天地の
 たくみをいかにたふべき
 しづく集り塵つもあり
 こるもいくその影象ぞや。
 いゆき憚るしら雲を
 麓なかばにとめおきて

海原遠くはこびゆく
 氷河の流君見ずや。
 嗚呼かぐはしき天地の
 たくみをいかたへまし
 ひとつの氣をもとゝして
 染むるいくその匂ぞや。
 沙^さ漠^{ばく}の月にほゆる獅子
 秋野の露にむせぶ蝶
 かのたてがみもこのはねも
 ひとついろとは誰か知る。
 竹の林にはしる虎
 汀の蘆に眠る田鶴
 この毛ごろもかの皮も
 同じたくみと誰か知る。

星地に落ちてそのあした
 谷間のゆりの咲く見れば
 露影消てそのゆふべ
 峯上の雲の湧く見れば！

おのが姿にあこがれて
 花となりしもあるものを
 清き乙女のむくろより
 などか堇の咲かざらむ。

(註)(1) Narcissus. Ovid: Metamorphosis I.

(1) Ophelia Shakespeare: Hamlet. Act. v. s. I.

靜 夜 吟

夢皆深し万象の
 眠も夜も半にけり
 神祕の幕は垂れにけり

今は下界も聖からむ。
 東の空を昇り来る
 星また星に聲も無し
 西の空行き沈み行く
 星また星に思あり。
 消えては凝る千萬の
 露のしづくに光あり
 凝りては消ゆる千萬の
 しづくの露に心あり。
 時に微風の一そよぎ
 知らず過ぎ行くたが魂か
 時に流るゝ星いくつ
 知らず落ち来る何の魂。

あゝ静かなる夜の
 浮世の夢をさめいでて
 なが永劫のふところ
 憂の子らを入らしめよ。

哀 樂

月ほの白う森黒く
 あらし睡れるさよ中に
 下界離るゝ魂二つ、
 ひとつの聲はさゝやきぬ
 「樂しかりけり世の夢は」
 ほかなる聲はつぶやきぬ
 「哀しかりけりわが夢は」

嗚呼 樂か 悲か
 も、年足らぬ夢の世の

清渭の流れ水やせて
 むせぶ非情の秋の聲
 夜は關山の風泣いて
 暗に迷ふかかりがねは
 令風霜の威もすごく
 守る諸營の垣の外
 丞相病あつき
 帳中眠かすかにて
 短檠光薄ければ
 こゝにも見ゆる秋の色
 銀甲堅くよるへども
 見よや侍衛の面かけに
 無限の愁溢るゝを
 丞相病あつき
 丞相病あつき

差別は何のわざならむ
 仰けば星はまたまきぬ
 月ほの白う森黒く
 あらし睡れるさよなかに
 下界はなるゝ魂二つ

星落秋風五丈原

祁山悲秋の風更けて
 陣雲暗し五丈原
 零露の文は繁くして
 草枯れ馬は肥ゆれども
 蜀軍の旗光無く
 鼓角の音も今しづか
 丞相病あつき

丞相病あつかりき。
 四海の波瀾收まらで
 民は苦み天は泣き
 いつかは見なん太平の
 心のどけき春の夢、
 群雄立ちてことく
 中原鹿を争ふも
 たれか王者の師を學ぶ
 * * * * *
 丞相病あつかりき。
 末は黄河の水濁る
 三代の源遠くして
 伊代の跡は今いづこ、
 道は衰へて文弊れ
 管仲去りて九百年

風塵遠し三尺の
 劍は光曇らねど
 秋に傷めば松柏の
 色もおのづとうつらふを
 漢騎十萬今さららに
 見るや故郷の夢いかに。
 * * * * *
 丞相病あつかりき。
 夢寢に忘れぬ君王の
 いまはの御こと畏みて
 心を焦し身をつくす
 白露のつとめ幾とせか、
 今落葉の雨の音
 大樹ひとたび倒れなば
 漢室の運はたいかに。

樂 殺 滅 び て 四 百 年
 誰 か 王 者 の 治 を 思 ふ。
 丞 相 * 病 あ つ か り き。
 鳴 呼 (二) 南 陽 の 舊 草 廬
 二 十 餘 年 の い に し へ の
 夢 は た い か に 安 か り し、
 光 を 包 み 香 を か く し、
 隴 畝 に 民 と 交 れ ば
 王 佐 の 才 に 富 め る 身 も
 た 一 曲 の 梁 步 吟。
 閑 雲 野 鶴 空 濶 く
 風 に 嘯 く 身 は ひ と り、
 月 を 湖 上 に 碎 き て は
 ゆ く へ 波 間 の 舟 ひ と 葉、

ゆ ふ べ 暮 鐘 に 誘 は れ て
 訪 ふ は 山 寺 の 松 の 影。
 江 山 さ む る あ け ほ の
 雪 に 驢 を 驅 る 道 の 上
 寒 梅 瘦 を 穿 て 春 早 み、
 幽 林 風 を 穿 つ と き
 伴 は 野 鳥 の 暮 の 歌、
 紫 雲 た な び く 洞 の 中
 誰 そ や 棊 局 の 友 の 身 は。
 其 隆 中 の 別 天 地
 空 の あ な た を 眺 む れ ば
 大 盜 競 ほ ひ は び こ り て
 あ ら び て 榮 華 さ な が ら に
 風 の 枯 葉 を 掃 ふ ご と
 治 亂 興 亡 お も ほ へ ば

世は一局の碁なりけり。
 其世を治め世を救ふ
 經綸胸に溢るれど
 榮利を俗に求めねば
 岡も臥龍の名を負ひつ、
 亂れし世にも花は咲き
 花また散りて春秋の
 遷りはこゝに二十七。
 高眠遂に永からず
 信義四海に溢れたる
 君が三たびの音づれを
 背きはてめや知己の恩
 羽扇綸巾風輕き
 姿は替へで立ちいづる
 草廬あしたのぬしやたれ、

古琴の友よさらばいざ、
 曉さむる西窓の
 残月の影よさらばいざ、
 白鶴歸れ嶺の松、
 蒼猿眠れ谷の橋、
 岡も替へよや臥龍の名
 草廬あしたはぬしもなし、
 成算胸に藏りて
 乾坤こゝに一局碁
 たゞ掌上に指すがごと、
 三分の計はや成れば
 見よ九天の雲は垂れ
 四海の水は皆立ちて
 蛟龍飛びぬ淵の外、
 英才(2)雲と群がれる

中原北に眺むれば
 * 關羽の敗死
 恨みは長し雲の色
 玉泉山の夕まぐれ
 襄陽遂に守りなく
 天か股肱の命盡きて
 興るべかりし漢の運
 赤符再び世に出
 河陽の渡り月は澄み
 定軍山の霧は晴れ
 三分の基はや固し
 漢中尋で陥りて
 雄師は圍む成都城
 金鼓震ひて十萬の
 あらしは叫び雲は散り

世も千仞の鳳高く
 翔くる雲井の伴やたそ
 東新野の夏の草
 南瀘水の秋の波
 戎馬關山いたくせか
 風塵暗きただなかに
 たてしいさをの數いかに
 江陵去りて行先は
 武昌夏口の秋の陣
 一葉輕く棹さしは
 三寸の舌吳に説けは
 見よ大江の風狂ひ
 焔亂れ大江の風狂ひ
 雄圖碎けぬ波あらく
 劍閣天にそび入りて

6/29

冕旒塵に汚されて
 炎精あはれ色も無し
 さらば漢家の一宗派
 わが君王をいただきて
 踏ませまつらむ九五の位
 天の曆數こゝにつぐ
 時建安の二十六年
 景星照りて錦江の
 流に泛ぶ花の影。

花とこしへの春ならじ
 夏の火峯の雲落ちて
 御林の陣を焚き掃ふ
 四十餘營のあといつこ
 雲雨荒臺夢ならず
 巫山のかたへ秋寒く
 名も白帝の城のうら

龍駕駐るいつまでか。

その三峽の道遠き
 永安宮の夜の雨
 泣いて聞きけむ龍榻に
 君がいまわのみことのり
 忍べば遠きいにしへの
 三顧の知遇またこゝに
 重ねて篤き君の恩
 諸王に父と拜されし
 思やいかにかに其宵の
 邊塞遠く雲分けて
 瘴烟蠻雨のすごき
 不毛の郷に攻め入れば
 暗し瀟水の夜半の月
 妙算世にも比なき

六たび祁山の嶺の上
 風雲動き旗かへり
 天地もどよむ漢の軍
 偏師節度を誤れる
 街亭の敗何かある、
 鯨鯢吼えて波怒り
 あらし狂ふて草伏せば
 王師十萬秋高く
 武都陰平を平けて
 立てり渭南の岸の上。
 拒ぐはたそや敵の軍、
 かれ中原の一奇才
 韜略深く密ながら、
 君に向はんすべぞなき
 納めも受けむ贈られし、
 素衣巾幗のあなどりも、

智仁を兼ねるほこさきに
 南夷いくたび驚きて
 君を崇めし「神なり」と。
 南方(四)に定りて
 兵は精しく糧は足る、
 君王の志うけつぎて
 姦を攘はん時は今、
 *江漢常武いにしへの
 ためしを今にこゝに見る
 建興五年あけの空、
 日は暖か到大旗の雲
 龍蛇も動く春の雲
 馬は嘶き人勇む
 三軍の師を随へて
 中原北にうち上る。
 *詩經大雅・王者の征討

病を扶け身を起し
 臥帳掲げて立ちいづる
 夜半の正空雲もなし。
 刁斗聲無く露落ちて
 旌旗は寒し風清し、
 三軍ひとしく聲呑みて
 つゝしみ迎ふ大軍師、
 羽扉綸巾膚寒み
 おもわやつれし病める身を
 知るや情の小夜あらし。
 諸壘あまねく經廻りて
 輪車静かにきしり行く、
 星斗は開く天の陣
 山河はつらぬ地の營所、
 つるぎは光り影冴て

陣を堅うし手を束ね
 魏軍守りて打ち出でず。
 鴻業果し^二收むべき
 その時天は貸さずして
 出師なかばに君病みぬ、
 三顧の遠きむかしより
 夢寐も忘れぬ君の恩
 答て盡すまごゝろを
 示すか吐ける紅血は、
 建興の十三秋なかば
 丞相病篤かかりき。
 魏軍の營も音絶て
 夜は静かなり五丈原、
 たは静かと思ふ今のまも
 丹心國を忘られず、

春玉樓の花の色
 いさほし成りて南陽に
 琴書をまたも友とせむ
 望みは遂に空しきか
 君恩酬ふ身の一死
 今更我を惜まねど
 行末いか漢の運
 過ぎしを忍び後後計る
 無限の思無限の情
 南成都の空いづこ
 玉壘今は秋更けて
 錦江の水瘦せぬべく
 鐵馬あらしに嘶きて
 劍關の雲睡るべく

結ぶに似たり夜半の霜。
 嗚呼陣頭にあらはれて
 敵とまた見ん時やいつ
 祁山の嶺に長驅して
 心は勇む風の前
 王師たゞちに北をさし
 馬に河洛飲まさむと
 願ひしそれもあだなりや
 胸裏百萬兵はあり
 帳下三千將足るも
 彼れはた時をいかにせん。
 成敗遂に天の命
 事あらかじめ圖られず
 舊都再び駕を迎へ
 麟臺永く名を傳ふ

12/19

鬼神も哭かむ秋の風、
 行て渭水の岸の上、
 夫の残柳の恨訪へ、
 劫初このかた絶えまなき
 無限のあらし吹過ぎて
 野は一叢の露深く
 世は北邙の墓高く。
 蘭は碎けぬ露のもと、
 桂は折れぬ霜の前、
 霞に包む花の色
 蜂蝶睡る草の蔭
 色もほひも消去りて
 有情も同じ世々の秋。
 群雄次第に凋落し
 雄圖は鴻の去るに似て

明主の知遇身に受けて
 三顧の恩にゆくりなく
 立ちも出でけむ舊草廬
 嗚呼鳳遂に衰へて
 今に楚狂の歌もあれ
 人生意氣に感じては
 成否をたれかあけつらふ。
 成否を誰れかあけつらふ
 一死盡くし、身の誠、
 仰けば銀河影牙えて
 無数の星斗光濃し、
 照すやいなや英雄の
 苦心孤忠の胸ひとつ、
 其壯烈に感じては
 鬼神も哭かむ秋の風
 (七)

6/29

銅雀臺の春の月
 今は雲間のよその影、
 大江の南建業の
 花の盛もいつまでか。
 五虎の將軍今いつこ、
 神機きほひし江南の
 かれも英才いまいつこ、
 北の渭水の岸守る
 仲達かれもいつまでか
 感極まりて氣も遙か
 聞けば魏軍の夜半の陣
 一曲遠し悲笳の聲。
 更に碧の空の上
 静かにてらす星の色
 かすけき光眺むれば

山河幾とせ秋の色、
 榮華盛衰ことくく
 むなしき空に消行けば
 世は一場の春の夢。
 撃たるものも撃つものも
 今更こゝに見かへれば
 共に夕の嶺の雲
 風に亂れて散るがごと、
 蠻觸二邦角の上
 蝸牛の譬おもほへば
 世々の姿はこれなりき。
 金棺灰を葬りて
 魚水の契り君王も
 今泉臺の夜の客
 中原北を眺むれば、

消えざるものはたゞ誠、
 心を盡し身を致し
 成否を天に委ねては
 魂たましひ遠く離れゆく。
 高き尊ミコトきたぐひなき
 「非運」を君よ天に謝せ、
 青史の照らし見るところ
 管仲樂毅たそや彼かれ
 伊呂の伯仲眺むれば
 「萬古の霄せうの羽毛」
 千仞翔る鳳の影、
 草廬にありて龍と臥し
 四海に出でて龍と飛ぶ
 千載の末今も尙
 名はかんばしき諸葛亮。

神祕は深し無象の世、
 あはれ無限の大うみに
 溶くるうたかた其はては
 いかなる岸に泛ぶらむ
 千仞暗しわだつみの
 底の白玉誰か得むの
 幽渺まほ境窮きゆうみなし
 鬼神のあとを誰か見む。
 嗚呼五丈原秋の夜半
 あらしは叫び露は泣き
 銀漢清く星高く
 神祕の色につままれて
 天地微かに光るとき
 無量の思齋さいらして
 「無限の淵」に立てる見よ、
 功名いづれ夢のあと

夕の磯

見よ夕日影波の上
 しばしたたゆたふ紅を
 沈まば盡きんけふ一日
 名残はいかにをしむとも
 久しかるべき影ならず
 見よ老びとの磯の上
 思にしづむ面影を
 逝かば終らむ身の一
 ほだしはいかにつらくとも
 久しかるべき命ならず
 嗚呼雲入りて星出で
 夕日は波にしづみけり

わが日わが世のあとひとつ
 夕波騒ぎ風あれて
 嗚呼老びとの影いづこ

暮鐘

« La cloche! écho du plié près de la terre.
 Voix grondante qui arle a côté du tonnerre.
 Fait pour la cité comme lui pour la mer!
 Vase plein de rimmur qui se vide dans l'air! »

Hugo: Les Chants du Crépuscule.

森のねぐらに夕鳥を
 麓の里に旅人を
 静けき墓になきがらを
 夢路の暗にあめつちを
 送りて響け暮の鐘

人住むところ行くところ
 嘆と死とのあるところ
 歌と樂とのあるところ
 涙悲憂きなやみ
 笑喜たのしみと
 互に移りゆくところ
 都大路の花のかけ
 白雲深き鄙の里
 白波寄する荒磯邊
 無心の穉子の耳にしも
 無聲の塚の床にしも
 等しく響く暮の鐘

春千山の花ふき
 秋落葉の雨の音
 誘うて世々の夕まぐれ
 劫風ともに鳴りやまぐず
 天の反響地の叫び
 恨の聲か慰か
 過ぐるを傷む悲か
 來るを招く喜か
 無常をさとしめか
 望を告ぐる法音か
 友高樓のおぼしまに
 別れの袂重きとき
 露荒涼の城あときに
 懐古の思しけきとき
 聖者静けき窓の戸に

雲飄揚の身はひとり
 五城樓下の春遠く
 都の空にさすらひつ
 思しのぶが岡の上
 われも夕の鐘を聞く。
 鐘の響に夕がらす
 入日名残の影薄き
 あなたの森に集るがごと
 むらがりたちて淀みなく
 そゞろに起るわが思。
 静まり返る大ぞらの
 波をふたゝびゆるがして
 雲より雲にどよみゆく
 餘韻かすかに程遠く
 浮世の耳に絶ゆるとも

知るや無象の天の外
 下界の夢のうはごとを
 名残の鐘にきゝとらん
 高き尊き靈ありと。
 天使の群をかきわけて
 昇りも行くか「無限」の座
 鐘よ、光の門の戸に
 何とかなれの叫ぶらむ、
 下界の暗は厚うして
 聖者の憂絶えずとか
 浮世の花は脆うして
 詩人の涙涸れずとか。
 長く、かすけく、また遠く
 今はたつとく一ひと
 呼ぶか閻浮の魂の聲

かの永劫の深みより、
 「われも浮世のあらし吹く
 波間にうきし一葉舟
 入江の春は遠くして
 舟路半ばに沈みぬ」と
 恨みなはてぞ世の運命、
 無限の未來後にひき
 無限の過去を前に見て
 我いまこゝに感あり
 はたいまこゝに望あり
 笑たのしみうきなやみ
 暗と光と織りなして
 歌ふ浮世の一ふしも
 いざ響かせむ暮の鐘、
 先だつ魂に來ん魂に
 かくて思をかはしつゝ

流一筋大川の
 泉と海とつなぐごと。
 吹くや東の夕あらし
 寄するや西の雲の波
 かの中空に集りて
 しばしは共に言もなし
 ふたつ再び別るとき
 「秘密」と彼も叫ぶらむ。
 人生、理想はた秘密
 詩人の夢よ迷よと
 我笑ひしも幾たびか、
 まひるの光かゞやきて
 望の星の消ゆるごと
 浮世の塵にまみれては
 罪か穢かわれ知らず。

其塵深き人の世の
 夕暮ごとくに聲あけて
 無限永劫神の世を
 警め告ぐる鐘の音
 源流すでに遠くして
 濁波を揚ぐる末の世に
 無言の教宣りつゝも
 有情の涙誘へるか。
 祇園精舎の檐朽ちて
 葦酒の香のみ高くとも
 セントソフィアの塔荒れて
 福音俗に媚ぶるとも
 聞けや夕の鐘のうち
 靈鷲攬橄いにしへの
 高き尊き法の聲。

天の莊嚴地の美麗
 花かんばしく星てりて
 「自然」のたくみ變らねど
 わづらひ世々に絶えずして
 理想の夢の消ゆるまは
 天の地有情の夕まぐれ
 わが駿鸞の夢さめて
 鳳樓いっつか跡もなく
 花もにほひも夕月も
 うつゝは脆き春の世や
 峯上の霞たちきりて
 縫へる仙女の綾ごろも
 袖にあらしはつらくとも
 「自然」の胸をゆるがして
 響く微妙の樂の聲
 その一音はこゝにあり。

曉
鐘

たえずも響けとこしへに
籟天籟身に兼ぬる
ゆふ入相の鐘の聲。

140
30
69

露

(日本海々戦の歌)

海なり晴なり夕なり。
 夜摩天上の瑠璃の宮
 黄金の塔、瑠璃の樓
 鏤め粧ふ百寶の
 色を、微妙のひらめきを
 東海今見る暮の榮、
 千波萬波のゆらめきに
 鷗の羽も染まるまで、
 水平線のひくきわみ
 一面さながら紅霓の
 焰と溶くるわだつうみ。
 蜃樓の粧天の一方

起	不	而	四
向	知	今	十
高	日	醒	餘
樓	已	眼	年
撞	過	始	睡
曉	亭	朦	夢
鐘	午	朧	中
王			
陽			
明			

崩れて波に入る如く、
 その波染むるくれなるの
 あとも流轉りてんのうたかたや、
 蓮漪は眠る花に似て
 次第にこむる霧の海、
 聖殿深く錦繡の
 帳のおほふ大鏡
 中に籠れる靈ありて
 夕しづかに立ちあがり
 未來の命を宣るごとく、
 莊嚴神祕の影凝らし
 うづまく暗に隠れ去る、
 大海原のしづけさや。
 * * * * *
 暗濤へだつる三百里、
 潮あしたに合すべき
 二つの水師西東、

一つ黄海の沖の南
 懸るは「破壊」のとき劍、
 一つ對馬の沖の上
 近きに笑むは「光榮」か、
 渦巻く潮吼ゆる波
 喚びぬ「戦今近し」
 龍王ちひろの淵出で、
 鯨鯢百千の群狂ふ
 あらびにまさる跡見よ」と。
 渤海遠き北の天
 波いま眠る旅順口、
 あらしも冰る冬二月
 八日夜半の波切りて
 電光の羽雷艇の
 飛びしこのかたいくそたび、
 鬼神も泣ける壯烈の

跡ぞ、陸には武の權化
 節は稜々の秋の霜、
 紅顔並びて地に倒れ
 白髮ひとり影を弔ふ
 恨それはた國のため、
 仁は春風の花の恩
 卒を見ること子の如き
 將軍血に泣く夜々の思、
 卒や幾萬焦熱の
 現世の冥府に飛び入りて
 虚空をおほふ炎々の
 鉛の雨に倒れしや。
 * 乃木大將
 嗚呼光榮は虹霓か、
 照るは涙のしづくより、
 盤龍の山、松樹の山
 白玉の山、鷄冠の山、

鐵血山の形變へて
 青燐白骨夜半に泣く
 悲憤に買ひし天の險、
 その港口今ねぶる
 鋼鐵の巨骸夢いかに、
 暗濤かすかに聲ありて
 半しづめる舟縁に
 告ぐるやいかに、寄せ來る
 千里あなたの艦艦の
 爾の友も命盡く」と。
 * * * * *
 北斗頭上に影高く
 冬宮夜半の夢成らず、
 香霧みなぎる紅繡の
 とぼりの中に薄命を
 悼むは誰ぞや玉冠を

のする頭の重しとも、
 十字架暗き大寺の
 塔の頂鳴りわたる
 鐘は叫びぬ光榮は
 われの響の時の數
 時もろともものうつろひと。

ペテルこのかた二百年
 龍攘虎搏日も足らず、
 ヤーヌス百の目を張りて
 遙にひとつ東に
 延びし雄略——黒龍の
 あした鐵馬は渴知らず、
 夕雲卷く長白に
 飛ぶ雙頭の鷲の旗
 その旗風に鴨緑の
 流も遂に波立ちぬ。

何ぞや彈丸黒子の地
 みだりに螳螂の臂あけて
 われの龍車をむかひ打つ
 ウラルの嶺の森にして
 手だれの木こり百鍊の
 斧に小枝を拂ふごと、
 ネワの春波みなぎりて
 残る氷を汐あらぶ
 北海遠く流すごと、
 民は一億帝領の
 雄師ひとたび地を蹴なば
 東夷忽ち伏すべくと。

望は夕の空の虹
 むなしく青に溶け行くか、
 『ツエザレキツチ』『レトキザン』
 夜半の轟雷碎き去り、

鳴緑の固南山の塞
 その目ををへず落ちてより
 百戦つねに我に不利
 東亞の覇府とまつろひし
 金城湯池仇の手に
 遼陽奉天十萬の
 肝腦ひとしく地にまみれ
 列世の略大露の名
 むなしく夢と消え去るか。
 あらしの沖のたゞ中に
 破船の水夫狂はしう、
 分秒ごとに沈み行く
 甲板の波あらければ
 半碎けし帆柱に
 今はとよろめき攀づること、
 最後の望あゝ爾、

残の水師ひつさけて
 クロンネタトの水門を
 怒潮もろとも乗りいでし
 あゝ魯提督いやはての
 頼なんぢの跡思ふ。
 リバウの岸の玉の聲
 龍馬あらしに泡嚙みし
 昨日は未だ「アウロラ」の
 光の影は没らざりき、
 鼓樂は空をゆるがして
 三十餘艦艦と舳と
 啣みし鐵の「レピアタン」、
 あら浪切りてのりいでし
 その運命のはて思ふ。
 運命かれの手をひきぬ

潮路遠し一萬里、
 水師わかれてそのひとつ、
 波は湯と湧く赤道の
 圓をあなたに外の極、
 十字の星の影のもと
 亞非利加南の岸めぐり、
 ひとつ歐亞の間の瀬戸
 東に越して地中海、
 長江スエズの水おそく
 千里むかへる兩岸は
 共に「シムーン」のある郷、
 遙に熱沙吹き送る
 紅海の波つんざきつ。
 いづれ南の極の天、
 山より高く立つ波に
 十丈直に空を突く

巨櫓の端も雨にして
 甲板望臺みな潮、
 潮に涵り吹きあらぶ
 貿易風を眞向に
 雷鼓轟くわだつみを
 過ぐれば東亞空近く、
 安南の沖夏五月
 五日みどりの波のうへ
 分れし水師めぐりあひ
 鼓樂ふたゝび空ゆりて
 艦隊ひとしく「皇帝」の名を。
 世界あらたに目を張りぬ、
 たぞ成敗のあけつらひ、
 曉清きあさ波に
 照す雙鬢霜經しや、
 なやみ海より深うして

一萬里外艤艦を
率し譽朽ちせざれ、
「敵いま近しあゝ奮へ
一死なんぢの邦のため」
邦の望を大帝の
勅を身に負ふ大都督、
バタンの瀬戸を後にして
北斗是より夜々高く、
臺灣ひがしの海峡を
乗切るのちは支那の沖
布かれし係蹄か運命か
祕密の手あり彼を引き、
驀地向ふいやはての
關門あなた^{*}の對馬沖。
白羽虚空をつんざきて
的に射集む矢の如く、
^{*}
^{*}
^{*}
^{*}

百川ともに東海に
溢るゝ水を入る如く、
世界ひとしくこゝに目を
注け滄溟波生れ
暗と光と渾沌の
胎より出でてわだつみの
夜と晝との天領を
わけしこのかたおほいなる
海の戦近きぬ。

緑波白浪風驅りて
地中海より眞西に
注ぐ大西洋の端
怒潮となりてうづまける
波上の偉人(大英の
東郷)かれのいやはての
ほまれトラファルガーの水

水は遙に今呼びぬ、
 『太平洋の波の友、
 百年新に廻り来る
 光榮なんぢの領の上』と。
 * * * * *
 裾三州の野にわたり
 肩を紫雲の外に抜く
 山か提督まじろかず、
 龍泉太阿魔を碎き
 干將莫邪妖を割く
 断は久しく定まれど、
 重きをになふ雙の肩
 霧たちこめて妖鯨の
 暗に逃れん憂より
 胸や千仞わだつみの
 底をかへして湧きあがり
 九天の碧ひたしうつ

波は思とみだれずや、
 有象の海にあらしあり、
 更に優れる心海の
 惱無象の荒る、波
 惱は常に聖なるを、
 天地をおほふいさをしを、
 讃ぜん前に嗚呼思へ
 千載つねにおほいなる
 惱に因りておほいなる
 人と靈とを見るべしと。
 空も苦惱の暗晴るゝ
 この日五月の二十七、
 遙かに沖の遠きより
 妙華の春のおとづれは
 歡呼とゞろく波のうへ
 無線の電に駈けり來つ、

提督起ちて一令を
傳へて抜ける千鈞の
錨のしづく三十里、
空は晴るれど海あらし
怒濤を蹴りてまつしぐら、
運命いづれ生か死か、
選いづれを厭はんや、
光榮ふたつの途に共。

嗚呼日本海夏の波
山とたちくる對馬沖、
上の無象の海にわく
時劫の潮また捲きて、
東西こゝにふたつの史、
二つにまじる大波瀾、
時やまさしく樞原
邦のもとゐのたちてより、

春秋互に移りくる
二千五百六十五、
おほいなるもの、高きもの
つねに満つれど目に觸れず、
ひとり神祕の名によりて
暗にひらめく電光の
たゞ一線を世に洩らす
靈いまこゝに三萬の
身となり血となり肉となり
水師となりて鋼鐵の
生けるがなかにたつを見よ。
銀浪捲きて雪散りぬ、
汐は矢と射る東水道、
見よ今煤烟こくうに引ける
鐵艦つゞく幾湮
末は濛氣に包まれて
露軍まさしく沖のあなた、

『皇國の興廢この役に懸る起てたて嗚呼壯士たちて扶桑の精凝れる武威を世界の自に示せ』

二萬の馬力潮蹴たて甲鐵ひとつの脈ゆらぐ

『三笠』敷島『富士』朝日、時はいたりぬ威怒の靈

十有二吋の砲の口、今雷霆をとどろかせ、

『春日』日進あらたなる

力妖魔の膽を裂け、

九千餘噸の装甲を

並べ波さく六の艦、

『淺間』常磐の霹靂に

『吾妻』八雲の威を競へ、

『出雲』磐手の切る猛火
未來の仇も震ふべく
金鐵粉と散らしめよ。

硝煙爆煙うづまきて

白日忽ち暗となり、

風輪狂ひてその暗を

忽ち拂ふ對馬沖、

強弩三千汐を射し

むかし何等の戯れぞ、

鉛のあらし火のあらし

潮のあらし吹きあらぶ、

南壹岐島沖の島、

北は鬱陵竹の島、

天地はあけて百國の

焔に狂ふ霹靂車。

飛衛の規切りはなつ
 降魔の巨弾亂れ落ちて、
 尺餘の鐵板蜂の巢と
 碎かれ沈む「オスラビヤ」
 今また暗に先んずる
 水雷砲火に威を添へて
 進むさながら矢の如く、
 *「ボロヂノ」「スワロフ」先王の
 名を負ふ友と相次ぎて
 溶くる千仞の波の泡、
 星は暗なる海のうへ、
 探海燈のすさまじき
 光めあてに碎かるゝ
 「シソイキリキイ」「ナバリノウ」
 あくる日降る運命を
 暗の大潮捲き返し
 流す「ニコラス」「アリヨール」

*アレキサンダア三世

暗の大海暗の波
 暗たゞ獨りあかしなる――
 鯨鯢下に駭きて
 壯烈鬼神を泣かしむる
 いさをの數を擧げ得んや、
 雲蒸長く時ありし
 二千餘年の國の粹、
 一兵一士ことごとく
 『勇の權化』と奮ひしを。

あゝ魯提督一掬の
 涙を君に捧ぐべく
 扶桑の民に心あり、
 波また波の一萬里
 東半球を横に斷ち、
 雨にあらしに狂ひ立つ

潮の山に半歳の辛酸つゆも報はれず、
 精を盡せし鋼鐵の三十餘艦、一萬の水師をのせて悉く
 みな龍王の犠牲か、敵の一艦しづめ得ず
 武連拙く捕はれし君勇なしと曰ふは誰ぞ、
 たゞ赫耀の朝光妖雲拂ひて日の昇る
 大東洋の東郷のおもてに立ちし運命を
 嘆け——あゝ名は日本海曠古のほまれ傳ふべく
 十億五洲の民こぞり胸のゆらぎを高うして

おとづれ待てる双の耳に
 飛電のたよりかけり行け
 あゝ鵬の羽をのす處
 あらしの海に戦争の
 ありしこのかた至高の名、
 丈餘金剛の筆とりて
 黄金の巻に刻むべく
 世界歴史の靈よ起て、
 今「光榮」は純白の
 もすそを風に飄へし
 波の緑の月桂の冠さゝけて微笑むに。

(明治三十八年夏)

* * * * *

萬里長城の歌

生ける歴史か積り來し齡は高し二千年、
影は萬里の空に入る名も長城の壁の上
落日低く雲淡く關山みすみ暮れの色、
征馬悵みて留りて遊子俯仰の影長く。

絶域花は稀ながら平蕪の緑今深し、
春乾坤に回りは空ことごとく霞み行く、
天地の色は老いずして人間の世は移らふを
歌ふか高く大空に姿は見えぬ夕雲雀

嗚呼跡古りぬ、人去りぬ、歳は流れぬ、千載の
昔に返り何の地か今秦皇の覇圖を見む、
殘壘破壁聲も無し、恨みも暗し夕ぐれの

春朦朧のたゞなかに俯仰の遊子影一つ。

二

三皇五帝あと遠く「六王終りて四海一」
四海の黔首ひれふして雷霆の威に聲もなし、
「わが宮殿を高うせよ」「たび呼べば阿房宮
「わが邊境を固うせよ」「たび呼べば萬里城、
春は驪山の花深く秋は上郡の雲暗く。

管絃の音雲に入る舞殿の春の夕まぐれ、
袂を擧げて軽く起つ三千の宮女花のごと
花を散して玉觥くわんに浮かす歌扇の風もよし、
彫龍の欄奥深く薫る蘭麝の香を高め
珠簾を洩るる銀燭の光残りて夜や明けむ。

西臨洮の嶺高しこゝ遼東の谿深し、
流を埋め山を截り壘を連ぬる幾千里
かゞりの焔天を燒き劔の光霜凝り

殺氣夏猶ものすごく守るは猛士二十萬
漠のこなたに胡笳絶えて匈奴の跡は遠ざかる。

三

「北夷の憂絶え果て、境は堅し國安し、
先王の書も焚け果てぬ、天下の儒者も埋まりぬ
わが萬世の業成りぬ、君王の思しかなりや。」

知るや夜半の阿房宮、後庭深く森暗く

歌臺の響よそにして、獨りあらしのつぶやくを
「浮世の花の一盛り、褪むるに早き色見ずや」

聞け長城の秋の營、旌旗の暗に消ゆるとき

またたく光露帯びて星の竊かにささやくを
「富も力も一場の夢、覺め果てん後思へ」

三 四

春靜かなる東海の緑を、涵す波の上

不死の金闕遠くして、童女五百の舟いづこ、

絳霞の光天上の花とこしへに匂へども

土に下れば沆瀣の示すは、獨り世の脆さ、

至尊の榮は高くとも名を、玉籍に留め得じ

金人十二鑄なせども、かれに無象のつるぎあり。

心を焦し身を碎くあゝ、韓朝の一孤臣、

爾の策は成らずとも、無常の風はあらかりき、

天地靜かに夜更けて、江流秋に咽ぶとき

獨り汜橋のかたほとり、燃ゆる心もしづまりて、

思ふやいかに人力の脆きを、命の定りを、

鐵椎血無し博浪沙、鮑魚臭有り沙丘臺。

五

嗚呼死屍未だ冷えずして、かれ「萬世の業」いづこ

暗君嗣ぎて上に在り、倭豎の害よなどあらしき、

民の怒は火の如く、戌卒は叫び兵は起ち

楚人の一炬閃きて、咸陽の宮みな焦土。

霽れざる空に虹懸けし復道の跡今いづれ、
雲あらざるに龍飛べる長橋の影はたいかに、
衰蘭露に悲めば遺宮空しく草の宿、
驪山の麓春去れば花ことごとく涙なり。

斬蛇のつるぎ炎精の光もさはれ極みあり、
甘泉殿の夜半の月かれも浮雲の恨みあり、
其移り行く世の習ひ二京の花をよそにして
邊土に立てる長城の連雲の影あゝ絶えず。

六

邦は亡びて邦に嗣ぎ人は代りて人を追ふ、
鼎は移る朝二十歳は流るゝ曆二千、
中華幾たび烽擧がり長城の壁越え來り
また越え去りし蠻族の數さへいかに世々の跡。

山川影は變らねど春夢空しくも跡も無し、
群雄の覇圖いたづらに残すは獨り史上の名、

獨り邊土に影絶えず齡重ねて二千歳
殘壘苔に今青む長城の影尊しや。

民の膏血世の笑ひ虐政のかたみそれながら
歴史の色に染められし萬里の影ぞなつかしき、
其面影に忍びいで泣くは懐古の露のみか
暮春の恨誰がために霞も咽ぶ夕ぐれぞ。

七

霞も咽ぶ夕ぐれの遊子俯仰の物思ひ、
北夷禦ぎし長城の昔の跡は變らねど
時世空しく流れては中華の姿明日いかに、
秦漢魏晉移り行く昔の跡を引替へて
西のあらしの吹き寄する黄海の波今あらし。

西曆一千九百年東亞のあらし明日いかに、
中華の光先王の道この民を救ひ得じ
愛を四海に傳ふべき神人の教今空語、

看ずや虎狼の牙鳴す「基督教徒」血に渴き、
群羊守る力無き「異教の民」の聲吞むを。

俯仰古今の物思ひ遊子の恨いつ盡きむ、

征馬懐みて嘶ける響を返す壁のもと

思も遠く眺むれば霞たゞよふ大空の

自然の樂も絶え果てつ關山暮れて星出でて

恨も含む長城の姿は暗に吞まれ行く。

さらば別れむとこしへにわが長城の壁のもと、

(盡きぬ思は大空の星の光に任せ置きて)

其星移る千載の時の流の末遠み

替らで影を尙とめむ殘壘にまた忍びでて

我世の今日を歌ふべき後の詩人はわれ知らず。

嗚呼^ウ永劫の脈搏^マはいづれの時か鎮まらむ、
人生舊を傷みては千古替らぬ情の歌、

破壁聲無き傍にまた落日の影を帯び

流るゝ光積り行く三千の昔忍ぶ時

かれ咏嘆の聲擧げて何の國語に歌はむか。

興廢移り悲喜まじる一人の跡一國の跡、

笑の蔭に涙あり暗のあなたに光あり、

玉樓の花風の恨み殘壘のあらし天の樂、

千載遠き後の世の詩人よ既に君の歌

今も響けり長城の暗に隠るる壁の中。

(一八九九年春稿)

(註)* 天下の兵器を收めて咸陽に聚め鎮して鐘離金人
十二を作る。(十八史略)

** 張良始皇を博浪沙に狙撃して成らず○始皇巡
狩の途沙丘平臺に崩す、群臣秘して喪を發せず一石
の鮑魚を以て其臭を亂る(同上)

*** "Pulschlag der Ewigkeit" Tiedmann 氏の句を直譯す。

花上の露

春のたましひ花とよび
曙の精露といふ。

雪より白き花の膚
汚に染まじ露の恩。

玉より清き露のしづく
碎けじ落ちじ花の恩。

春のあけぼの花と露
結べる契り誰が手より。

あゝ花露によりてゑみ
あゝ露花によりて生く。

月と水

山の端いづる夕の月

谷間流るゝ夕の水

天と地とは隔たれど

二つかたみにこひしたふ。

影は親しくやどせども

むつみ語らんすべもなみ

月の恨みに空くもり

水の恨みに瀬はむせぶ。

かくて空なる月の旅

かくて下界の水の旅

いつか望みの影そひて

流れは澄みぬ空晴れぬ。

月は落ち行く西のそら
水は流るゝ西のうみ
海と空とは隔てねば
月と水との戀なりぬ

唄帳吟

其一

天女の胸に凭りかゝり
うつろひ果てし花束を
抛ち棄てゝわれ泣くと
見しもはかなの夜半の夢。

覺めても熱きわが涙
拭ひもあへず窓あけて
見れば緑の青葉かけ
落ち行く月は圓からず。

いみじきものはかなしと
今さらのるか夜半の鐘
昔も霞の底深く
引かれて遠きわが思ひ。

其二

花にあこがれ花に泣く
浮世の春は暮れにけり
霞む月かけ夜半のかけ
八重の櫻の木のもとの
短き夢をいかにせむ
さめずありなばあゝ戀よ

花散り果てし青葉かけ
今更清し夜半の月
昨日の影を戀ふべしや
今日の光をめぐべしや
思に迷ふ人の子に

三 悟をたまへあゝ神よ

夏の夜

はやたそがれの影寄せぬ
 風おもむろに吹きかよふ
 都大路の夏けしき
 洗ひすてたる夕立の
 名残柳に玉とめて。
 まばゆく照らす電燈の
 光はにほふ夜の花
 湯あがり姿逍遙の
 すがた幾むれ袖軽く
 咽ぶはたかきローズの香。

おほ空高く月いでて
 八百のちまたの隈もなく
 照す涼しき夏の夜や
 雲はしづかに収まりて
 残る稀なる星のかけ。
 そゞろあるきに夜ふけて
 袂は重し露ふかし
 月な・めなる時計臺
 ふたつの針の重りて
 うつも高しや時の數。
 傾きかゝる天の河
 仰ぎて家路さして行く
 逍遙の群あともなし
 ちまたのあるじ今はたゞ
 月の光と吹く風と。

『暗と眠』

喘ぎ疲れて西ぞらに弦月遠く沈むあなた
 劫初我世に造られし光照らざる森の中
 『暗』と『眠』の影ふたつ、
 かれ氣を吐きて人界の涙を夜半におしぬぐひ、
 これ手を舉げて煩へる天地を夢に誘ひ行く。

秋興八首

一
 一陣吹きぬ秋の風、
 雲より送る悽慘の自然の吐息たがためか、
 山河姿を改めて非常も暮の色悵み
 清怨堪へず聲を呑む詩人ことごとく涙あり、

誰か彩虹を攀ぢて空高く
 淋しき下界の塵の色を
 かみ銀漢の流に洗はむ

嗚呼一歌われすでに傷みぬ、
 天は黄昏を帯ぶ一様の愁。

二

玉露楓樹も秋の歌

杜陵の詞仙金鐘のしらべは餓を補はじ、
 西歐の空眺めても詩神の寵兒みな愁
 桂樹のほまれ緑葉の光は花の色ならじ。
 枉けて兒童の師と詫ぶる垂翅は況して不似の分
 さらば滄浪の曲に人の世の窮達の跡を忍ばんか。

嗚呼二歌われ我を嘆きぬ、
 雲は残陽を蔽ふ惆悵の色。

三